

## 新しい時代の札幌都心まちづくり

札幌は、今まさに世界都市を目指して、都心の魅力と活力を高める動きを起こす。そういう時期を迎えています。

これまで、札幌は急成長する人口や産業活動を支えるため、都市基盤の整備を精力的に進めてきました。21世紀は、これまでのストックを活用して都市としての個性・風格を備え、「あんな街に住みたい」と世界の人々に認められ、尊敬されるようなまちにしていきたいと思います。

そのときのキーワードを、私は「環境と文化」と考えています。

豊かな自然を大切にするなど環境と共生する都市であることは、札幌の大きな特長です。また人々が学び伝え、織り成してきた生活のあり様を、私は都市の文化と言いたいと考えています。その意味からも世界に誇れる札幌の都市文化を育てていきたいものです。

都心は本来、わが街“さっぽろ”を最もよく表している“顔”であり、そこではいろいろな刺激や発見、楽しみがあり、それが繰り返し新鮮なものに常に置きかえられていく。多くの人々が、地域での日常生活を営みながらも、都心の魅力にひかれ楽しむ。

また都心では、良い意味での競争がある。新しいことにチャレンジする者が現われ、素晴らしいもの、魅力あるものを提案する。それを受けてさまざまな交流が生まれ、また次の挑戦が始まる。

都心がこうしたステージであってこそ、札幌を訪れた世界の人びとの心に、さわやかな印象を刻むことができるのではないのでしょうか。

このような新しい時代の都心づくりを実際に進めるためには、市民、企業、商店街組織、NPO、行政などのさまざまな主体が協働して取組むことが不可欠です。この計画は、そのような都心まちづくりを効果的に展開するための枠組みを整理するものとして策定いたしました。

今後、関係者が思いを同じくして、より具体的な目標や取組みを共有化し、世界に誇れる“さっぽろ”の顔となる都心のまちづくりを進めていきましょう。

平成14年6月

札幌市長 桂 信雄

## 風土的都市デザインと札幌

北海道の風土は、北欧やアメリカ北東部と似ているとよく言われる。森や林を歩き、広大な農地を眺めるとき確かにその共通性を感じる。光と陰影が造りだす自然環境の美しさは素晴らしい。北海道がそなえる風土的特質はこの光の鮮やかさと清明さであろう。しかし、自然が与える光と陰影の感動を都市において受けるであろうか。その答えは否定的である。都市は北海道が誇る光の贈り物を十分に生かしていない。風土とは自然環境と人工環境が共同して創りだす文化的表現といえる。そうであれば都市という人工環境をより質の高いものにしてゆかなければ、北海道の風土は高い評価をうけられない。北海道の都市空間はまだ文化的固有性を備えていないと思う。確かに住宅については北海道型の空間形式ができてきた。しかしその空間形式が文化的価値を有しているかということそうではないと思う。耐震性、保温性に優れている住宅であっても、それ等が街並みとなったとき、風土性をそなえた美しい市街地として評価されないからである。

北海道の風土性そしてその都市における空間的表現について、私は定見がない。いえることはすくなくとも東京の建築群やその市街地像ではないことである。そして他方で北欧諸都市のイミテーションであってはならないことである。さいわい、北海道の諸都市は本州と比べて道路や公園等の公共用地は充分にある。問題はその空間の質が必ずしも高くないこと、道路や公園と建物の関連についての配慮が充分でないことである。建築の立場で街並みを整える努力をすれば、それにともなって道路や公園のデザインの質を高める必要性が明らかになる。これからの時代、都市景観自体が経済を活性化する重要な存在になると言われている。ストックホルムやヘルシンキがそれぞれの国家の中核として国際的経済のなかで健闘しているのは、その都市自体が美しく文化的な個性を備えているからである。札幌は北海道の首都である。その札幌に都市的魅力が備わっていなければ北海道の経済成長は期待できない。

札幌の中心部の方向性についてこれ迄いろいろ検討が加えられて、一定の成果をあげてきた。しかし考えてみると、その内容は土地の高度利用や経済活性化に重点が当てられていて、アーバンデザインの議論は充分にされていない。その点に関して特に言いたいことは、大通公園とその周辺の建築群である。この街並みについて北海道の風土性を創りだせる景観のイメージを衆知をあつめて創りだす時期にきていると思う。21世紀の、風土に立脚した都市デザインを是非札幌で確立していただきたい。

## 志をもて・遠くを見よ / 目標の創出と共有

「志をもて、遠くを見よ」 これは高知・桂浜にある坂本竜馬記念館で出会った言葉です。

20世紀の成長都市・札幌は明快な計画を持った都市であったと言えます。21世紀では、成熟した世界市民が交流・生活する世界都市を目指す段階に入るべき札幌です。

近代化を目指す文明に支えられてきた装置としての成長都市を、文化を育む環境としての成熟都市へ変容させることが、21世紀、世界の都市づくりの目標となっています。

21世紀の世界都市・札幌を目標とした都市づくりの将来像はどうあるべきなのか？ 都心の再生計画とは何か？ また目標実現への戦略をどう組み立ててゆくのか？

その全体像の素描を示しつつ、都心再生への目標と戦略についての共有化が重要です。

120余年前、島判官は山の頂から札幌の姿を描き始めました。この目標の具体化と実現の過程には、島判官の強い志と責任感が随所に伺うことができます。

21世紀の初頭、札幌の将来像のあり様を議論し、まちのハート・都心の将来像を描き出し、その目標と実現戦略を次世代の市民と共有していくことは、世界都市市民としての札幌人にとっての責任でもあります。

そして、「世界都市への志」「参加と決断の勇氣」「実現への責任」。これが私たち札幌人に求められている具体的内容といえます。

多くの市民が参画し、世界都市・札幌への長期的目標像の創出するプロセスが大切です。加えて、札幌人の協働によって目標を実現する仕組みや新しい組織も重要となります。

「志をもて、遠くを見よ。そして、北方圏の世界都市札幌への道程の協創を」

平成14年6月

都心まちづくり計画策定協議会 座長 小林 英嗣